大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

熊の親切,ウサギの迷惑：レヴィナスとマルクス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 俊治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005999

熊の親切、ウサギの迷惑
－レヴィナスとマルクス－

萩原　俊治

はじめに ― 「熊の親切」

誰かに親切にしたからといって、それで相手に感謝されるとは限らない。その親切が相手を不愉快にさせ、それをきっかけとして二人の関係が壊れる。そんなことが私たちの日常ではよく起きる。こんな親切をロシア語では「熊の親切」と呼ぶ。ウサギさんの背中に蚊がとまっているので親切な熊さんが思いっきり叩くと、ウサギさんが大怪我をしたとか、要するに、ハタ迷惑な親切のこと。

どうして「熊の親切」みたいなことが起きるのか。それは私たちの生きている世界には、二種類の親切 ― 「熊の親切」と本当の親切があるのに、私たちはその違いに鈍感になっているからだ。このため、私たちはついうっかり「熊の親切」を他人に向ける。とんだハタ迷惑というぐらいで収まればいいが、それはしばしば笑い事ではすまされない結果を引き起こすことにもなる。たとえば、あとでふれる「熊の親切」のひとつ、マルクス主義の場合、その親切によって殺された犠牲者は一億人以上にものぼる。

これからその二種類の親切の違いを明らかにしてゆこう。楽天的に過ぎるかもしれないが、その違いが明らかになれば、マルクス主義のような「熊の親切」による犠牲者も減少してゆくかもしれない。まず『カラマーゾフの兄弟』から、その二種類の親切を生みだす二つの愛について述べているゾシマの言葉を取り上げることにしよう。ゾシマによれば、「熊の親切」は「空想の愛」から、本当の親切は「行動の愛」から生まれる。重要な箇所なので長い引用になる。

隣人は愛せない、でも人類は愛せる

ある貴婦人がゾシマ長老に質問する。自分が死んでしまったあと、一切が無に帰するとすれば、それは身の毛もよだつ恐ろしいこと。それなのにわたくしには来世の生活があるとは信じられません。ごく幼い頃は大人から言われるまま来世の生活もあると信じておりましたけれど、今ではまったく信じることができません。どうすればこの不安から抜け出すことができるのでしょうか、教えて下さいまし。ゾシマが答える。

「行動の愛を重ねることです。倦むことなく、まず、あなたの身近な人たちを行動によって愛してごらんなさい。あなたがじっさいの行動によって誰かを愛すれば愛するほど、神が存在していること、あなたの霊魂が不滅であることがしだいに明らかになってきます。そして、身近な人を愛するとき自分をまったく犠牲にしてもかまわない、という風になられたら、神

の存在や霊魂の不滅を確信されるはずです。何の迷いもなく、あなたはそう確信されるはずです。これは経験によって確かめられた本当のことなのです。」(1)

行動の愛を重ねれば、霊魂の不滅を確信できるようになるのですか。わたくしそんなことはできません。貴婦人がいう。

「行動の愛ですって。困りましたわ。これがまた大問題。ね、そうでしょ、大問題。でも、あの、わたくし、信じていただけますかしら、とっても人類というものを愛しておりますので、何かの拍子に自分の持っているものすべてを投げ捨ててしまおう、一人娘のリーズも置いて家を出ていってしまおう、そして、人のお世話をしようなどと思いますの。そんなとき目を閉じて、あれこれ考えたりしていますと、抑えきれないほどの力が自分の中に湧いてくるように感じますの。どんな傷だって、膿で汚れた傷だって、わたくし平気ですわ。自分の手で包帯をしてさしあげたり、傷口を洗ったりもできますわ。わたくし、苦しんでいる人たちの看護婦になりたい。膿みにまみれた傷に接吻したい・・・」(2)

あら、調子に乗りすぎたかしら、彼女はあわてて言葉を重ねる。

「でも、そんなことに長いあいだ耐えられるでしょうか。これがいちばんの問題。これがわたくしをいちばん苦しめる問題。目を閉じて自分に尋ねますの。あなたは長いあいだこの道を歩き続けることができるのか。もし、あなたに傷を洗ってもらっている患者が、すぐ感謝を返してよこさず、逆に、気まぐれな振る舞いであなたを苦しめたり、あなたの人類への奉仕に気づきもせず評価もせず、あなたを罵倒し、粗暴な要求をするばかりで、それに苦しんでいる者にはよくあることだが、あなたの上司にあなたに対する不平さえ言う、もしそうなれば、どうする？それでも同じ道を歩き続けるのか。こう聞かれますと、わたくしドキッといたします。でも、わたくしの答はきまっております。恩知らずな振る舞いこそ、わたくしの<行動による>人類愛をあっというまに冷ますもの。これが答。ひとことで申しますと、わたくし報酬目当ての労働者でございますの。その場で報酬、お褒め頂いたり、お返しの愛といった報酬を頂戴しなければ収まりませんの。お返しがなければ、わたくし誰も愛せません。」(3)

「<行動による>人類愛」、この言葉を聞いたゾシマはある医者の話を紹介する。

「その方はもうかなり年輩の、疑いなく思慮の深い方で、その方も今のあなたのように率直に話して下さいました。もっとも自虐、ほろりと苦い自虐がまじってはおりましたが。その方

(1)『ドストエフスキー全集』第14巻、ナウカ、レニングラード、1976、p.52

(2)『ドストエフスキー全集』第14巻、p.52

(3)『ドストエフスキー全集』第14巻、pp.52-53

が言われるには、わたしは人類を愛しているが、自分でも驚くことがある。人類全体を愛すれば愛するほど、個々の人間、ひとりひとりの人間を愛せなくなってくる。空想の中では人類のために奉仕したいと思いつめることもあるし、じっさい、どうしても必要だということになれば、人類のために十字架の上で死ぬこともできるかもしれない。それなのに、二日と同じ部屋で他人と暮らすことができない。これは経験したことなので自分にもよく分かる。その人が自分の近くに来ただけで、わたしの自尊心は圧迫を受け、わたしの自由は束縛を受ける。一昼夜のうちにわたしは申し分のない人でさえ憎むようになりかねない。長いあいだモグモグ食事をしている、鼻を悪くしていてのべつまくなしハナをかむ、そんなささいな理由のためにその人を憎むようになりかねない。ほんのちょっと近づいてくるというだけで、その人はわたしの敵になってしまう。その代わり、ひとりひとりの人間を憎めば憎むほど、人類全体に対するわたしの愛の火はますます激しく燃えさかるようになる。と、その方は言われるのです。」(4)

わたくしもその方と同じですわ。隣人は愛せないけれど人類は愛することができます。でも、隣人を愛せないわたくしには、霊魂の不滅や幸せな来世は夢でしょう。いつまでも死の恐怖に囚われて生きなければならないのですね。ゾシマの答。

「残念ながら、これ以上あなたを喜ばせることは何も言えません。というのも、行動の愛は空想の愛とは違って苛烈で恐ろしいものだからです。空想の愛に憑かれた人は、できるだけ手早く手柄を立てて満足したい、皆に自分を見てほしいと願うものです。じっさい、長くかかるのはいやだ、一刻も早くやってしまいたい、皆に見てもらいたい、褒められたいという一心から、芝居でもやっているように自分の命さえ投げ出してしまう人もいます。このような空想の愛と違って、行動の愛は仕事であり忍耐です。ある人々にとっては学問そのものかもしれません。あらかじめ申しあげておきますが、いくら努力しても目的に到達しないばかりか遠ざかっているとさえ思われ、恐怖にかられるとき、そのとき突然、あなたは目的に到達するのかもしれません。そのとき、あなたは、いつもあなたを愛し、いつもひそかにあなたを導いてくださっている主の不思議な力を目にするかもしれないのです。」(5)

これで『カラマーゾフの兄弟』からの引用は終わる。二人の会話を整理しておこう。

この会話はまず貴婦人の死への恐怖から始まる。死への恐怖を克服するにはどうすればいいのか。ゾシマはこの問いに対して「行動の愛」を重ねればその恐怖から逃れることができるという。なぜ逃れることができるのか。それは「行動の愛」を重ねることによって死への恐怖を忘れることができるようになるからだ。そのとき、恐怖を忘れ、隣人のために自分をすべて犠牲にする、たとえば死ぬこともできるようになる。またそのとき、霊魂の不滅や神

(4)『ドストエフスキー全集』第14巻、p.53

(5)『ドストエフスキー全集』第14巻、p.54

の存在を確信できるようになるだろう。そうゾシマはいう。

なぜ「行動の愛」を重ねてゆけば死への恐怖を忘れ、霊魂の不滅を確信できるようになるのか。この問いにゾシマは答えない。ただ「行動の愛」に徹しなさいと言うだけだ。それはゾシマも含めたさまざまな人々の経験によって明らかだから。

ゾシマは「行動の愛」についてはほとんど何も言わない。そして、「行動の愛」の対極にある「空想の愛」について語り、そして、「行動の愛」を暗示するだけだ。このゾシマのいう「空想の愛」についてもう少し詳しく述べてみよう。また、「行動の愛」をゾシマよりももう少し明確に述べてみよう。はじめに予告したように、この「空想の愛」とは「熊の親切」を生みだすものであり、「行動の愛」は本当の親切を生みだす。ゾシマのいう「空想の愛」と「行動の愛」を明確なものにすることによって、「熊の親切」と本当の親切の違いも明確になるだろう。

「行動の愛」と「空想の愛」

どうして私たちは「行動の愛」ではなく「空想の愛」に向かうのか。それは、私たちが自己中心的であるからだ。別稿で述べたように(6)、近代以前においてすでに鞏固なものであった、あらゆるものを操りたいという私たちの自己中心的な欲望は、近代以降、ほとんど全面的に肯定されるようになる。これは、その自己中心的な欲望の歯止めとなっていた中間集団と宗教が、近代以降、影響力を失うからだ。例外はあるにしても、その欲望が衰える兆しはほとんどない。より安全で快適な生活を追求するため、私たちは自然、社会、家族、さらに自分自身といったあらゆるものを操ろうとする。この私たちの自己中心性が私たちを「空想の愛」に駆り立てる。説明しよう。

自己中心的な私たちは目の前にいる人間も自分の思うままに操ろうと思う。しかし、そう願っても、それは自然科学の対象となるような物質とは違う。それはロボットでない。人間という意志をもった存在だ。当然自分の思うままに操ることはできない。私たちの自己中心的な欲望は満たされないままに終わる。こうして、ゾシマの話の中に出てくる医者と同じような言葉を私たちもつぶやく。「その人が自分の近くに来ただけで、わたしの自尊心は圧迫を受け、わたしの自由は束縛を受ける。」

これに対して、目の前にいない空想の中の「人類」や「人間」ならば自分の好きなように操ることができる。それは意志をもった現実の他者ではなく、自分の空想が生みだした他者にすぎない。空想ならば思いのままだ。この空想の他者に個性はない。それは私の自尊心を圧迫することもなければ、自由を束縛することもない。

従って、空想の愛に耽る者は、自分の空想の中の抽象的な人間を愛していることになる。ゾシマの話に出てくる医者も、その貴婦人も、そして私たちも、人類を愛しているというとき、隣人ではなく自分の空想を愛しているだけだ。この自己の内部をぐるぐる回る運動。「空

(6) 拙稿「いのちの関係を求めて」、『<いのち>響き合う世界へ —— 生命論の再構築に向けて』所収、関西大学出版部、2000、pp.45-75

想の愛」とは、この決して私の内部から外部に出てゆかない自己中心的な運動のことだ。ドストエフスキーの作品にしばしば登場する夢想家とは、このような運動から逃れられない近代以降に生きる私たちの自画像でもある。

ところで、この自己中心的な運動に熱中する私たちが誰かに親切にするとき、それは「熊の親切」にならざるを得ない。なぜなら、それは「ともかく良いことをしよう」という一念で行われるものであるからだ。なぜそう思うのか。それは自分が善良な人間であるということを一刻も早く他人に見せたい、一刻も早く自分でも善良さにおいて他人よりも優れていると確認したいからだ。これが自己中心的な模倣の欲望から生まれるものであることについてはすでに述べた(7)。この模倣の欲望による虚栄から生まれるのが、ゾシマと話している貴婦人が思わず口にする「<行動による>人類愛」なのである。これは目の前にいる人間に対する愛ではない。相手の顔もろくに見ないで親切を施した当人が「ともかく自分は良いことをした」という満足感にひたるだけだ。「熊の親切」を受けた結果、相手はしばしば大きな迷惑をこうむることになる。

「熊の親切」が前稿で述べた「最初の暴力」のひとつであることは明らかだろう(8)。最初の暴力とは次の二つの条件のうち、少なくとも一つを備えたものであった。①他のヒトの物語を聞かないこと。②自分の物語を他のヒトに押しつけること。相手の話をろくに聞かないで自分の親切を相手に押しつける「熊の親切」は、この二つの条件を十分に満たしている。また、これも前稿で述べたように「最初の暴力」によってさまざまな身体的・言語的な「二次的暴力」が引き起こされるのだが、「熊の親切」を受けた者もしばしば相手を呪い、二次的暴力を準備する。「逆恨み」と呼ばれる事態は、このような熊の親切を受けた者によって引き起こされる。「最初の暴力を含まない親切」すなわち本当の親切を受けた者が相手を逆恨みすることはない。

「熊の親切」には日常的なものから人類の存続を危うくするようなものまである。私たちは今や病的という他ないほど自己中心的な生活を送っているので、日常的な「熊の親切」は私たちの周囲にうんざりするほどあふれている。例をあげるまでもないだろう。それよりも私たちが余り気づかない、しかし人類の存続を危うくする、「善意」にあふれていると同時に凶暴な「熊の親切」について述べておかなければならない。はじめに述べたように、そのような「熊の親切」として真っ先に挙げなければならないのは、これまで一億人もの犠牲者を出してきたマルクス主義だろう。

マルクスの親切

マルクス主義によって殺された一億人の内訳は次のようになる。

---

(7) 拙稿「わが隣人ドストエフスキー —— 模倣の欲望をめぐって」、『論集・ドストエフスキーと現代 —— 研究のプリズム』所収、多賀出版、2001、pp.399-425

(8) 拙稿「あなたには癒しでも私には暴力 —— 物語と最初の暴力」、『言語と文化』創刊号（大阪府立大学総合科学部言語センター紀要）、2002、pp.155-168

ソ連（2000万）、中国（6500万）、ヴェトナム（100万）、北朝鮮（200万）、カンボジア（200万）、東欧（100万）、ラテンアメリカ（15万）、アフリカ（170万）、アフガニスタン（150万）、国際共産主義運動と、政権についていない共産党（約1万）。(9)

眩暈を覚えるような数字だ。これはヒトラーの国家社会主義によって殺された人々の4倍になる(10)。言うまでもないことだが、この一億人の死が家族など周辺の人々を自殺や病死、あるいは精神的な死に追いやったことは容易に想像がつく。私たちは家族や友人と結ぶ「いのちの関係」なしに生きることはできない(11)。死者の家族や友人など、間接的な犠牲者も考慮に入れるとすれば、マルクス主義によって死に追いやられた人々はこの何倍にも達するだろう。

マルクス主義はなぜこのような惨禍をもたらしてきたのか。それはマルクスの思想が悪意ではなく、「善意」に満ちたものであったからだ。マルクスの思想は「人類を平等にしてあげよう」という彼の「善意」から生まれた。このため多くの人々がマルクス主義に魅力を感じ、現在も多くの人々がそう感じている。しかし、私的所有と市場の否定に行き着くマルクス主義は、結局人類に前例のない惨禍をもたらすことになる。マーティン・メイリアはマルクスの「善意」の内容を簡潔に説明している。

マルクスが『共産主義宣言』のなかでいっているように、「共産主義者は、自分の理論を、私的所有の廃止、という一語にまとめることができる」［村田陽一訳『共産党宣言』、「マルクス=エンゲルス全集」第四巻］。すると、次のようなことがいえる。私的所有の産物である「利潤」と、実際に利潤をあげるための手段である「市場」も廃止されなければならない。そこで社会主義の最大限綱領要求主義者（マクシマリスト）［ロシア社会民主労働党（のちのロシア共産党）内の極左的な小分派］的な図式ができあがる。すなわち、社会主義とは、「平等」という道義的発想から生まれ、私的所有と市場の廃止でその頂点に達する。そこまで到達しないうちは、真正社会主義とはいえない。（［　］内は翻訳のまま）(12)

メイリアによれば、マルクスの教えである私的所有と市場の廃止を、世界ではじめて忠実に実行していった「最大限綱領要求主義者」が、レーニンとトロツキー、そしてスターリンの三人だ。

私の知る限りでは、これまでソ連の社会主義革命に共感する人々のあいだで、トロツキー

---

(9) ステファヌ・クルトワ、ニコラ・ヴェルト『共産主義黒書 —— 犯罪・テロル・抑圧 —— <ソ連篇>』、外川継男訳、恵雅堂出版、2001、p.12

(10)『共産主義黒書 —— 犯罪・テロル・抑圧 —— <ソ連篇>』、p.23

(11) 拙稿「いのちの関係を求めて」、pp.47-49

(12) マーティン・メイリア『ソビエトの悲劇 —— ロシアにおける社会主義の歴史 1917-1991』（上）、白須英子訳、草思社、1997、p.59

が善玉、スターリンが悪玉のように言われてきた。スターリンの代わりにトロツキーがレーニンの後継者になっていたら、ソ連はこんなひどい状態にはならなかっただろう、そう彼らはしばしば嘆息してきた。

しかし、メイリアによれば、これはマルクス主義に幻惑された者のタワゴトにすぎない。実現不可能な世界同時革命を唱えたトロツキーの方こそ、ソ連の社会主義革命を一挙に破滅に導こうとしたお調子者なのである。このためスターリンは非現実的な共産主義者であるトロツキーを排除せざるを得なくなった。スターリンの出現によってソ連が一挙に非人間的な全体主義国家になったわけではない。ソ連がそうなったのは、スターリン個人の性格のためもあるが、それ以上にマルクスの思想そのものに欠陥があったからだ。スターリンはマルクス主義から生まれた鬼子なのではなく、レーニンと同様、いやレーニン以上にマルクスの教えを忠実に守った人物にすぎない。メイリアはそういう。

マルクスの思想はどこに欠陥があるのか。メイリアによれば、マルクスの思想の欠陥は、彼の理論がヘーゲルによって完成するドイツ観念論の亜流であったのにもかかわらず、私たちの生活世界に直接働きかけ、それに変更を迫ろうとした点にある。変更を迫らないとすれば、マルクスの理論も、それまでのドイツ観念論と同様机上のものにとどまり、私たちの生活世界に多大な厄災をもたらしはしなかっただろう。観念論であるにも拘わらず現実に変更を迫るところにマルクスの思想の欠陥がある。しかし、ロシアをはじめとする多くの国々の人々はマルクスの理論を机上のものだとは思わなかった。彼らはそれをきわめて現実的な卓越した理論と思い、それを実現しようとしてきた。

なぜ彼らはマルクスの机上の理論を現実的なものだと思ったのだろう。それは、私たちの生きている世界がさまざまな不平等に満ちているからだ。この呻きと悲鳴に満ちた世界を一刻も早く平等な世界にしたいと願っている人々が、マルクスの理論に惹かれるのは当然だ。

このマルクスの平等に対する渇望はマルクスひとりのものではない。メイリアも指摘しているように、ルソー以来しだいに私たちの世界に浸透してきた現世における平等主義の流れが、マルクスに至って頂点に達したのにすぎない。マルクスは自らの理論によって貧しい虐げられた人々を救済しようとした。このため、その理論は多くの「善意」の人々の心をとらえてきたのだった。しかし、その犠牲者の数を見ても明らかなように、その私的所有と市場の否定に至る理論は私たちの生きている世界に敵対するものだった。理論に欠陥があったため、マルクスの「善意」は実現されなかった。そうメイリアはいう。しかし、私はこのメイリアの意見に賛同することはできない。なるほどマルクスの理論は欠陥のある誤った理論であったかもしれない。しかし、誤っていたのはマルクスの理論だけではない。私見によれば、マルクスの理論に限らず、現実に対して強制的に適用される理論はすべて程度の差はあれ誤ったものとなる。

<行動による>人類愛

というのも、前稿で述べたように、物語というものは「最初の暴力」であり、物語の一種である理論もまた最初の暴力であるからだ(13)。もちろん、理論そのものは物語ではない(14)。そこにはランガーのいうような「具体的な時間の流れ」はない。正確に言えば、ある理論はその背後にある、具体的な時間の流れをもつ物語によって成立している二次的な物語なのである。理論とはいわば即席ラーメンのような乾燥食品なのであり、それはお湯あるいは水に戻せば「具体的な時間の流れ」をもつ物語に還元される。還元するのは、私たちの想像力だ。想像力によって、私たちはある理論の背後にある物語を復元する。たとえば、私たちはマルクスを読むことによって、搾取され貧困の中で呻いているさまざまな人々が、自らの権利のために立ち上がる物語を思い浮かべる。従って、理論は物語そのものではないが、私たちの想像力の参加によって物語となる二次的な物語なのである。

二次的ではあるが物語であることには変わりはないので、ある理論は他の理論を放逐し、程度の差はあれ独裁的に世界を支配しようとする。従って、いかなる理論であれ、ある理論を現実に対して強制的に適用するとき、それは「最初の暴力」になると同時に、暴力を受ける者にとっては誤った理論になる。なぜなら、誰もが同一の物語を生きているわけではないからだ。ある理論が現実に対して強制的に適用されなければ、それはたんに潜在的な暴力にとどまるだけだ。しかし、すでに述べたように、マルクス主義には強制的に適用してもよい十分な理由があった。すなわち、悲惨な世界に生きている私たちの平等に対する渇望。ルソー以来のこの私たちの渇望がマルクスの理論を強制的に現実に対して適用させたのである。もはや何が誤っていたのか明らかだろう。私たちの平等に対する渇望そのものが誤っていたのだ。この渇望がドイツ観念論風のマルクスの理論を性急に現実に適用させたのである。もう少し詳しく説明しよう。

メイリアも指摘しているように、マルクス思想の中心概念である「プロレタリアート」とキリスト教の虐げられた貧しい人々は同じものだ(15)。違いは、イエスのいう貧しい人々はこの世で社会的平等な扱いを受ける可能性がほとんどないのに対し、マルクスのいうプロレタリアートは階級闘争に参加し社会的平等を獲得できるという点にある。マルクスはイエスとは違って、虐げられている貧しい人々に来世での幸福ではなく現世での幸福を約束した。イエスは平等の帳尻を来世で合わそうとし、マルクスはこの世で合わそうとしたのである。二人の違いはそれだけだ。しかし、この違いは大きい。

なぜなら、キリスト教の平等が「私たち」ではなく神によって実現されるものであるのに対し、マルクス主義の平等は「私たち」によって実現されるものであるからだ。言い換えると、キリスト教では世界を操ろうとする私たちの自己中心的な欲望は抑制され、マルクス主義ではその欲望は抑制されない。もちろんキリスト教もまた物語であるので「最初の暴力」

---

(13) 拙稿「あなたには癒しでも私には暴力 —— 物語と最初の暴力」、pp.158-160

(14) 拙稿「物語と理論」、『英米言語文化研究』No.45（大阪府立大学英米言語文化研究会）、1997、pp.145-156

(15) マーティン・メイリア、p.75

を孕んでいることに変わりはない。異民族に対して略奪を繰り返した十字軍などの例を見れば明らかだ。しかし、物語としての限界はあるとしても、キリスト教の物語では基本的に神によって人間の自己中心的な欲望は抑制される。これに対して、近代の特徴を帯びたマルクス主義の物語では、人間の自己中心的な欲望は基本的に抑制されない。この抑制されない自己中心性がマルクス主義の「善意」を「最初の暴力を含んだ親切」すなわち「熊の親切」に変えてしまう。

要するに、ゾシマと話していた貴婦人のいう「<行動による>人類愛」を制度として実現しようとしたのがマルクス主義なのである。すでに述べたように、その貴婦人は私たちの姿そのものだった。私たちの生きている世界は貧困と不平等に満ちているので、そのような事態を目にする私たちもその貴婦人と同様、「<行動による>人類愛」によって、その貧困や不平等から人々を救出したいと渇望する。なぜ渇望するのか。これもすでに述べたように、その渇望は私たちの自己中心的な模倣の欲望から生まれる。一方、貧困や不平等の中にいる人々のほとんども同じ自己中心的な模倣の欲望に憑かれているので、貧困や不平等から自分たちを救い出してくれる理論、たとえばマルクスの理論に賛同する。これについてはすでに詳しく述べた(16)。救出しようとする者も救出される者も同じ欲望に憑かれているのである。

従って、マルクスの理論がメイリアのいうようにドイツ観念論風の不完全なものであったことは確かだとしても、その理論を現実に性急に適用させた私たちの平等への渇望が間違っていたのだ。

要約しよう。マルクス主義者たちは二重の誤りを犯した。ひとつはマルクスの理論がドイツ観念論の流れをくむ机上の理論であったことを見逃したこと。もうひとつは、現実に適用するには余りにも不完全なその理論を性急に現実に適用したこと。この二つの誤謬を支えているのが私たちの自己中心的な欲望だ。この欲望がマルクスに「空想の愛」に満ちた理論をもたらすと同時に、私たちをその「空想の愛」から生まれたマルクス主義という「熊の親切」の実現に駆り立てた。一億という死者は私たちの「空想の愛」の犠牲者なのである。

さて、ここでマルクス主義という「熊の親切」の特徴を要約しておこう。

①「善意」にあふれた物語である。
②物語なので「最初の暴力」を孕んでいる。
③「善意」にあふれた物語なので、誰も表立っては反対できない。
④「善意」にあふれた物語なので、それを他人に押しつけようとする「善意のヒト」がたくさん現われる。
⑤「善意」にあふれた物語なので、それを押しつけられたヒトはついつい受け入れてしまう。
⑥その物語を押しつけられたヒトは結局ひどい目にあう。

これは「熊の親切」一般の特徴でもある。すでに述べたように、このような親切は日常的にはありふれている。しかし、マルクス主義以外に、人類の存続を危うくするような大規模な「熊の親切」はあるのだろうか。ヒトラーの国家社会主義や日本が太平洋戦争当時に唱え

(16) 拙稿「『貧しき人々』と隠された欲望」、『むうざ』8号、ロシア・ソヴェート文学研究会発行、1989、pp.54-73

た大東亜共栄圏構想などが思い浮かぶ。しかし、いずれもマルクス主義のような全人類規模のものではない。いくつか候補が思い浮かぶが、これについては稿を改めて述べてみよう。これからも「善意」に満ちた全人類規模の「熊の親切」が姿を変えて私たちの前に現れてくるだろう。近代社会を生きる私たちが自己中心的であるかぎり、私たちが「空想の愛」を放棄することはない。従って、私たちが全人類規模の「熊の親切」を行使する可能性は常にある。

「空想の愛」から生まれる「熊の親切」についてはこれくらいにして、次に「行動の愛」から生まれる本当の親切について述べてゆこう。

二つの「ケノーシス」

ゾシマが貴婦人に言った言葉を再び思い出そう。「行動の愛を重ねることです。倦むことなく、まず、あなたの身近な人たちを行動によって愛してごらんなさい。あなたがじっさいの行動によって誰かを愛すれば愛するほど、神が存在していること、あなたの霊魂が不滅であることがしだいに明らかになってきます。」

自分の信仰についてあれこれ悩んでいるより、まず、行動によって隣人を愛すること、それが信仰にとってはいちばん大事なことです。そうキリスト教徒のゾシマはいう。ユダヤ教徒であるレヴィナスもこれとほぼ同じことをいう。彼らは口をそろえて「行動の愛」こそもっとも重要なものだという。ゾシマあるいはドストエフスキーのキリスト教信仰とレヴィナスのユダヤ教信仰は異質なものだが、これは今やヨーロッパ近代とキリスト教の圧倒的な影響のもとで生きている私たちにとって自明の事柄であるとは言えない。従って、まずキリスト教とユダヤ教の違いを手短に述べておかなければならない。その後、二人のいう「行動の愛」について述べてゆこう。

キリスト教とユダヤ教の違いは多くあるが、その中から「ケノーシス」に対する両者の異なった態度について述べてみる。取り上げるのは、ケノーシスこそキリスト教とユダヤ教を離反させるものであると同時に結合させるものであるからだ。

ケノーシスとはギリシア語で自分を無にすること、謙譲であるということだ。キリスト教はケノーシスを肯定し(17) ユダヤ教は否定する(18)。たとえば、キリスト教徒は右の頬を打たれれば無条件に左の頬を差し出すが、ユダヤ教徒は特に正当な理由もなく打たれた場合、左の頬を差し出さない。またキリスト教では神の国に入るために利己主義を否定しなければならないが、ユダヤ教ではほんの少しの利己主義は信仰にとって有害でないどころか、むしろ必要なものだ(19)。ユダヤ教徒は自分を無にするケノーシスを認めることができない。ところが、このケノーシスをユダヤ教徒レヴィナスが「受け入れます。絶対に」と断言するの

---

(17) 新約聖書、「ピリピ人への手紙」2/5-9

(18) ミルトン・スタインバーグ『ユダヤ教の考え方 —— その宗教観と世界観』、山岡万里子訳（手島勲矢監修）、ミルトス、1998、p.127

(19) ミルトン・スタインバーグ、p.122

である[20]。彼のこの発言がユダヤ教徒のあいだで物議をかもすのは当然だ。

しかし、レヴィナスがキリスト教のケノーシスを全面的に受け入れることはない。彼は多くのユダヤ教徒と同様、自分を無にして無防備なまま相手の攻撃に身を委ねるケノーシスに反対する。たとえばレヴィナスは無防備なまま十字架に架けられ殺されたイエスを肯定できない。「十字架にはりつけられた無力なキリストは結局、十字軍を招いたのです！しかもキリストは、暗殺者を阻止するために十字架から降りてはこなかったのです！」とレヴィナスはいう[21]。

レヴィナスによれば、無抵抗のまま十字架の上で殺されていったキリストのケノーシスあるいは無力さがキリスト教のケノーシス主義に受け継がれているのであり、それが結局、異教徒に対する十字軍の残虐行為を容認するという結果を招いたのだ。レヴィナスはここで明らかに、キリスト教徒のドイツ人によって絶滅収容所に送られていったユダヤ人を念頭に置いている。そのドイツ人たちはナチスの暴力に対して無力なまま、ユダヤ人たちに対しても無責任なままガス室に送っていった。これは十字軍と同じではないのか。なぜ残虐行為を止められないのか。それはキリスト教のケノーシス主義がもつ無責任さのためだ。そうレヴィナスは言いたいのである。

ここでレヴィナスは持論を繰り返しているだけだ。無防備だということは他者と溶融し自我境界を喪失しているということだ。自我境界のない存在は他者の「同」に取り込まれると同時に、他者を自己の「同」に取り込む。そこでは責任をもつべき自己も他者もなく、他者に対する愛も成立しない。プラトンが言うような自我境界のない融合する愛は愛ではない。そこには無責任と自己愛しかない[22]。プラトンと同様、キリスト教のケノーシスでも自己はすべて他者と地続きなのであり、その自己中心性とも他者中心性とも言えない無責任さこそレヴィナスが激しく糾弾するものだ。十字軍が異教徒に対して略奪と虐殺を繰り返していたとき、どうしてキリスト教徒たちの中からそれに反対する声が上がらなかったのか。それはキリスト教徒たちが異教徒という他者を自分の「同」、すなわち自分たちの物語にとって異物だと解釈していたからだ。このようなキリスト教徒の自我境界を撤廃する態度は、そもそもイエスのケノーシスに原因がある。そうレヴィナスは言いたいのである。

しかし、すでに述べたように、多くのユダヤ教徒とは異なり、レヴィナスはキリスト教のケノーシスそのものは肯定する。なぜなら、自己中心的である限り、私たちが他者に手を差し伸べることはないからだ。手を差し伸べるためには、自己中心性をできるだけ縮小して、すなわち自分をできるだけ無にしなければならない。そのとき初めて、虐げられた「ユダヤ的存在」である隣人に手をさしのべることが可能になる。「ユダヤ的存在」とはユダヤ人に象徴されるような迫害され虐げられた人々のことだ。キリスト教のケノーシスがいかに胡散臭

(20) エマニュエル・レヴィナス『超越と知解可能性 —— 哲学と宗教の対話』、中山元訳、彩流社、1996、p.76

(21) エマニュエル・レヴィナス『諸国民の時に』、p.277

(22) 詳しくは、拙稿「愛と自我境界 —— ドストエフスキーからレヴィナスへ」、『ドストエーフスキイ広場』No.9、2000、pp.67-80

いものであろうと、それが自己中心性を縮小するものであることに間違いはない。レヴィナスの認めるケノーシスとは「自我境界のあるケノーシス」、「ユダヤ教的なケノーシス」なのだが、彼はキリスト教徒がケノーシスにおいて自己中心性を縮小することについては高く評価する。

ということになれば、ゾシマはキリスト教徒なのだから、彼のいう「行動の愛」とは「自我境界のないケノーシス」ではないのか、という疑いが生まれる。あと少しレヴィナスの発言を読んでみよう。彼はキリスト教徒たちとのシンポジウムで次のように語る。

「だれが信仰をもてと言ったのかね」

すべての人間の普遍性や「すべての人間のために」といった概念とユダヤ教との類縁性を、ケノーシスの理論のうちに認めるのは、私にとって好ましいことです。「すべての人間のために生き死ぬ」という意味において、私はキリスト教を理解しました。本源的な人間性、それは —— ショックを受けないで下さいよ！ —— どんな人間のうちにも秘められたユダヤ的存在であり、特殊なもの、個別的なもののうちで響くユダヤ的存在のこだまなのです。キリスト教徒たちは、彼らが信仰、神秘、秘跡と呼ぶものをたいそう重視しています。この点に関して、ちょっとしたエピソードをお話ししましょう。死の直前に、ハナ・アーレントがラジオで語ったことです。生まれ故郷のケーニヒスベルクで彼女が子供時代を過ごしていたときのことです。ある日、彼女に宗教を教えてくれるラビのもとに赴いたアーレントは、「あのう、私は信仰を失いました」と告白しました。するとラビは、「ところでいったい、だれが信仰をもてと言ったのかね」と答えたそうです。意味深長な答えです。重要なのは信仰ではなく、「為すこと」なのです。「為すこと」が道徳的な行いを意味することは言うまでもありませんが、それはまた典礼をも意味しています。そもそも、信じることと為すことは別物でしょうか。信じることはなにを意味しているのでしょうか。信仰はなにから成るのでしょうか。言葉から成るのでしょうか。観念から成るのでしょうか。確信から成るのでしょうか。なにをもって、私たちは信じるのでしょうか。身体のすべてをもってです！私の骨のすべて（『詩篇』35/10）をもって、です。「善き行いは信じるという営為そのものである」、と先のラビは言いたかったのでしょう。これが私の結論です。(23)

ここでレヴィナスは隣人愛よりも信仰を優先させるキリスト教徒たちを批判している。キリスト教徒たちの多くは信仰、神秘、秘跡と呼ぶものをとても重視しているが、それは愚かなことではないのか。なぜなら「善き行いは信じるという営為そのものである」のだから。そして彼は、キリスト教の自我境界のないケノーシスの胡散臭さには口をつぐみながら、そのケノーシスによって成し遂げられる善行そのものは肯定する。

なぜレヴィナスは多くのユダヤ教徒たちからの反発をものともせず、また自分にとっても

(23) エマニュエル・レヴィナス『諸国民の時に』、合田正人訳、法政大学出版局、1993、pp.273-274

胡散臭いキリスト教のケノーシスを肯定するのか。それはユダヤ教とキリスト教の共存を願うためだ。彼は信仰よりもまず隣人愛を優先させることによってキリスト教とユダヤ教の共存を目指す。

すでに述べたように物語は「最初の暴力」なのだが、物語である信仰もまた「最初の暴力」であることに変わりはない。今は詳しくふれることはできないが、ケノーシス以外にもキリスト教の物語とユダヤ教の物語は相容れない点を多くもつ。だから、いずれが正しい信仰であるのかを争えば、当然、双方が際限のない二次的暴力を相手に加えることになるだろう。このような事態を避けること、これが「同」を乗り越え「他者」に向かおうとするレヴィナスにとって、もっとも重要な課題なのである。

しかし、それは容易なことではない。なぜなら、私たちが自己中心的であるかぎり、その信仰もまた自己中心的なものにならざるをえないからだ。物語である信仰はレヴィナスのいう「言葉」や「観念」、「確信」などによって私たちの自我をまとめ、同じ信仰を持たない人々を私たちから遠ざけ、私たちをいっそう自己中心的にする。この自己中心的な信仰は同じ信仰をもつ人々のあいだでは拡大してゆくだろう。しかし、異なった信仰をもつ人々にまで拡大することはない。そして二次的な暴力が信仰の異なる人々あるいはグループのあいだで引き起こされる。だから、私たちはまず何よりも自分たちの自己中心性から抜け出さなければならない。このためには、まず最初に自己中心的な自我を限りなく、しかし自我境界を保持したまま、縮小しなければならない。これがレヴィナスにとってのケノーシスなのであり、謙譲であるということだ。また、このため、彼はケノーシスを高く評価する。私たちが自己中心性をできる限り縮小させ謙譲にならなければ、信仰そのものが異教徒の隣人に対する暴力となってしまう。そして「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(24) という神の命令に違反することになる。

何度も言うように、これはキリスト教の自我境界が撤廃されたケノーシスとは異なる。しかし、自我境界を設定しさえすれば、キリスト教のケノーシスもまたレヴィナスのいうケノーシスと同じように、他者に対する責任を担うことができるものになる。レヴィナスがキリスト教のケノーシスをほめたたえ、キリスト教徒たちに向かって自我境界の設定を執拗に訴えるのはこのためだ。

要するにレヴィナスはキリスト教徒たちにこう言いたいのだ。「キリスト教徒たちよ、あなたたちはあと少しで本当の隣人愛に到達できる。足りないのは自我境界だけだ。」このキリスト教における自我境界の設定なしにはユダヤ人やその他の異教徒たちに平和は訪れない。

すでに述べたように、近代に生きる私たちにとって謙譲になることはきわめて困難だ。従って、キリスト教徒といえども、その大多数は程度の差はあれ謙譲からは遠い。一方、ハリウッド映画などによってプラトン主義的な「融合する愛」に親しんでいる私たちにとって、他者との自我境界の撤廃はきわめて容易だ。ということになれば、謙譲ではないのに自我境界を欠いているキリスト教徒が多数存在することになる。そのような人々は異教徒たちを自

(24) 旧約聖書、「レビ記」19/18

分たちの「同」に取り込もうとするだろう。このため、異教徒たちは自分を守るためにキリスト教徒と争わなくてはならなくなる。これは困ったことだ。だから、レヴィナスはキリスト教徒たちに「自我境界を持ちなさい」と呼びかけるのである。

さて、ここでゾシマのいう「行動の愛」に話を戻そう。主に以前述べたことを反復するだけなので、駆け足で述べておこう。ドストエフスキーがキリスト教のケノーシスに強く惹かれていたのは確かだ。彼はキリスト教のケノーシスの化身ともいうべき『罪と罰』のソーニャや『白痴』のムィシュキンを描いた。彼らの自我境界は撤廃されている。このため、ソーニャは現実味のない夢の中の人物のように描かれ、ムィシュキンは出会う人すべてと溶融してゆき、彼らから自我境界を奪い錯乱状態に追い込んでゆく。また、この当時、作者のドストエフスキーもまた自我境界を持てず、ギャンブル依存症に苦しんでいた。すでに述べたように、依存症は自我境界を設定できないことから生じる。ある時期までドストエフスキーはキリストのケノーシスに忠実でありすぎたのだ。依存症が近代の病であることについてはすでに述べたが[25]、それ以前に依存症は、キリスト教によってすでに準備されていたと言えるだろう。

しかし、これもすでに述べたように『カラマーゾフの兄弟』を書いていた当時、ドストエフスキーの依存症は過去のものになっていた[26]。このときドストエフスキーは自我境界の設定に成功すると同時に、キリスト教のケノーシスのもつ落とし穴にも気づいていたと見るべきだろう。なぜなら、彼は『カラマーゾフの兄弟』で初めて他者に対する「責任」に言及しているからだ。「私たち全員がすべてのことについて、すべての人々について責任があるのです。そして私は他の人たち以上に責めを負わなければならないのです」というマルケルの言葉、特に「私は他の人たち以上に責めを負わなければならないのです」という言葉。このレヴィナスが好んで引用する言葉は、ドストエフスキーが晩年に至ってようやく自我境界の設定に成功したことを示している。従って、『カラマーゾフの兄弟』の登場人物であるマルケル、ゾシマ、アリョーシャには十分自我境界が設定されていると見るべきだろう[27]。また、キリスト教のケノーシスからゾシマのいう「行動の愛」が生まれるのではなく、それはレヴィナスが肯定するケノーシス、すなわち「自我境界のあるケノーシス」から生まれると見るべきだろう。しかし、これだけではドストエフスキーとケノーシスの関係を十分に論じたとは言えない。今はこれで満足することにして、その関係については日を改めて詳細に論じることにする。

これで「行動の愛」について述べるのは終了し、最後に「行動の愛」の実例をヴァシーリー・グロスマンの小説『人生と運命』から紹介しておこう。紹介するのは話が余りにも抽象的になりすぎたからだ。この小説をソ連政府はタイプライターのリボンまで押収して徹底的に抹殺しようとしたが、結局失敗した。レヴィナスはスターリン主義とヒトラーの国家社

---

(25) 拙稿「わが隣人ドストエフスキー —— 模倣の欲望をめぐって」

(26) 拙稿「わが隣人ドストエフスキー —— 模倣の欲望をめぐって」

(27) 拙稿「愛と自我境界 —— ドストエフスキーからレヴィナスへ」

会主義がもたらした悲惨な世界を描いたこの小説を高く評価しながら、こういう。

この本の中には前向きな要素もないわけではありません。前向きな、控えめではあるけれども心慰めるような、あるいは奇跡的な要素があります。それがまさしく善性ということです。体制なき善性、善性という奇跡、それが残された唯一のものなのです。けれども善性はいくつかの孤立した行為を通じてしか眼には見えません。たとえば、この本の終わりのほうに不思議な動きが現れます。とても苛立った、非常に悲惨な境遇の女が群衆の中にいます。群衆は囚人となったドイツの一人の敗残兵に憤慨しているのです。彼は囚人のグループの中でもっとも憎まれています。ところがその男に、女は残された最後のパンのひときれを与えるのです。囚人たちが、自分たちが拷問を加え殺害してきた人々の死骸を地下室から引き出してくる場面です。恐ろしい場面ですが、女の行為はシステム全体の外部にある一つの善性の行為です。(28)

ここでレヴィナスが「システム」というのはスターリン主義のことではなく、私たちが囚われている自己中心的な世界のことだ。この自己中心性を限りなく縮小し、「自我境界のあるケノーシス」を実現した女は善行を行う。女は自分の行為にとまどう。この心の貧しい女はなぜ自分がそんな善行をしてしまったのか理解できない。しかし、ひとときであれ、彼女が自己中心性を縮小させたことは確かだ。小説の舞台はソ連とドイツが激しく戦ったスターリングラード。敗北したナチス・ドイツの兵隊たちが地下室から虐殺したソ連人を運び出してくる場面だ。ここで自らを愚かだと見なしている女の「自我境界のあるケノーシス」が正確に描かれている。

終わりに代えて —— 『人生と運命』第49章

ゲシュタポ野戦司令部のあった二階屋の地下から、ドイツ人捕虜たちがソ連人の死体を運び出していた。

寒さの中、老人たち、少年たち、何人かの女が番兵の脇に立ち、ドイツ人が凍った地面の上に死体を並べてゆくのを眺めていた。

捕虜のほとんどは同じような顔つきをして、死体から立ち昇る臭気を吸い込みながらのろのろと歩いていた。

その中で将校用の外套を着た若い男だけが鼻と口に汚いハンカチを巻き付け、まるでアブに刺されてひりひりするとでもいう風に、頭を馬のように激しく振っていた。苦悶に満ちたその目は狂人のもののようにも見えた。

捕虜たちは地面に担架を置くと、死体を降ろしはじめる前に考え込み、死体のそばに立っ

(28) エマニュエル・レヴィナス、フランソワ・ポワリエ『暴力と聖性 —— レヴィナスは語る』、内田樹訳、国文社、1991、pp.180-181（引用文の後半は誤訳なので改訳した：Emmanuel Levinas, Qui êtes-vous?, La Manufacture, 1987, Lyon, p.137）

た。担架の死体のいくつかは身体から手足がもげていた。彼らはどの死体にどの手足が合うのかと考えながら手足を死体のそばに置いていった。死体の大半は半裸の下着姿だったが、軍服のズボンをつけた死体もあった。何も身につけていない、叫んでいるように口を開いた死体が一体あり、そのぺちゃんこの腹は背骨とくっつき、細くて薄っぺらな両足のあいだで恥毛が赤ちゃけていた。

想像もできないことだけれど、この深くえぐられた穴にすぎない口や眼をつけたさまざまな死体が、つい最近まで名前や住所を持っていて、「可愛い人」「良い子ね」「キスして」「ほらごらん」「忘れないで」などと喋ったり、手巻き煙草を吸ったり、早く飲みたくてうずうずしながらビールのジョッキを思い描いたりしていたのだ。

そんなことを感じているのは、どうやら、口にハンカチを巻き付けた将校だけのようだった。

しかし、他ならぬこの将校が地下室の入り口にいた女たちを苛立たせた。女たちは息をのんでその男を見つめているだけで、他の捕虜には無関心だった。その中の二人が、ナチス親衛隊の記章を外した跡も鮮やかな外套を身につけていたというのに。

「あら、顔をそむけたよ」

将校を目で追いながら、子供を抱えたずんぐりした女がつぶやいた。

彼は自分をなめるように激しく見つめているそのロシア女の視線に圧迫されているように感じた。湧き起こってきた憎しみの感情をどこにぶつけたらいいのか、女はどうしてもその憎しみをぶつける相手を見つけないでは収まらないようだった。それはまるで森の上にさしかかった雷雲が稲妻を落とさないでは収まらない、森の樹を手当たり次第に灰にしてしまわないでは収まらないという風だった。

彼の相方になっていたドイツ人は背の低い兵隊で、首に碁盤縞のタオルを巻き付け、脚を袋で包み、その上から電話線でぐるぐると縛っていた。

地下室の入り口にいる人々の視線があまりにも険悪なので、ドイツ人たちは死体を降ろすと地下室に入り、なかなか出てこなかった。表に出て外気を吸い込みながらそんな視線に出会うよりも、死臭の立ちこめる地下の闇の方がましだった。

ドイツ人捕虜たちが空になった担架をもって地下室に向かっていると、彼らにもおなじみの下品な罵声が飛んできた。

捕虜たちは急ぎ足にならないよう地下室に歩いていった。動物的な直感で、ちょっとでも急げば自分たちが群衆に襲われるということは分かっていた。

ハンケチを口に巻いた将校が短い悲鳴をあげた。番兵がうんざりして言った。

「クソガキ、どうして石を投げる。このドイツ野郎がくたばったら、お前が代わりに運ぶつもりか」

地下室で兵隊たちが言葉をかわした。

「ひどい目にあうのは隊長だけで十分じゃないか」

「あの女、隊長をずっと見ている」

地下室の闇の中から誰かの声が聞こえた。

「隊長殿、一度地下室で休まれてはどうでしょうか。最初に隊長殿が運ばれたのですから、あとは私たちがやります」

そう言われた将校は眠そうな声でつぶやいた。

「いや、隠れてるわけにはゆかない。これは最後の審判なんだ」

将校はそう言うと、相方の兵隊に顔を向けた。

「さあ、行こう」

将校と相方の兵隊は前より少し急ぎ足で出口に向かった。荷は前より軽いものだった。担架で運ばれていたのは十四、五歳の少女だった。その死体は乾燥してしぼんでいたが、乱れた金髪はねっとりしたミルクのような光沢を失ってはいなかった。その美しい髪が、赤茶けて黒ずんだ鳥の死骸のように無惨な顔のまわりにあった。

激しく叫んだのはずんぐりした女だった。鋭いナイフで凍えきった空気を切り裂くように叫んだ。人々がかすかにため息をもらした。

「まあ、かわいそうに、かわいそうに、こんな可愛い子が！」

叫び声は見ていた人々の心を激しく揺さぶった。女は死体の頭に手を伸ばし、まだパーマネントの跡の残った髪をなで、石のように固く曲がった口のついた顔を見つめていた。女はまるで母親のように死体を見つめていた。母親だけがこの恐ろしい顔と、おむつを着けて笑いかけてきた、生きていた頃の愛らしい顔を同時に見ることができるとでもいうように。

女は立ち上がると、将校に一歩近づいた。誰の目にも女が何をしようとしているのかが分かった。女は将校を見つめながら、同時にその目は煉瓦を、凍りついて他の煉瓦とくっついてはいるが、そう固くはくっついてはいない煉瓦を地面の上に探していた。女の大きな手はその過酷な労働、冷たい水や熱湯、アルカリ洗剤などで痛めつけられ、無様に変形していた。そんな手なら、地面から煉瓦を剥ぎ取ることもできるのかもしれない。

これから起きるに違いないことを番兵は予感していた。しかし、女を制止することさえできなかった。番兵も番兵の自動小銃も女の前では無力だった。ドイツ人たちも女から目をそらすことができなかった。子供たちは今か今かと待ちかまえながら食い入るように女を見つめていた。

女にはもう口にハンカチを巻き付けたドイツ人将校しか目に入らないようだった。周囲の者全部を支配している自分の力、自分もまた支配されているその力をどう扱ってよいのか分からず、女は上着のポケットをまさぐって、前の日、赤軍兵士からもらったパンのかけらをひっぱり出すと将校に差し出し、言った。

「さあ、あげるから、食べな」

あとになって考えてみても、なぜそんなことが起きたのか、自分がなぜそんなことをしてしまったのか、女には分からなかった。不当な仕打ち、無力感、恨みなどに満ちた耐え難い時間、女はそんな時間をたくさん味わってきた。植物油の入った小瓶を盗んだと責め立てる隣人との争い、アパートの苦情を言いに行ったのに、聞いてももらえず地区ソヴィエト議長の部屋から追い出されたこと、息子が結婚し自分の部屋から追い出されたときの悲しみと憤激、そして身重になった嫁に「淫売ババア」と呼ばれ、体調を崩し眠れなくなったこと。あ

る晩、神経を乱し悪意に満ちたままハンモックに横たわっていたとき、女はあの冬の朝のことを思い出し、「わたしは愚かだった、今も愚かだ」と思った。(29)

(29) ワシーリー・グロスマン『人生と運命』、モスクワ、2001、pp.808-810

Oh, my bear, not be so nice to me…
——Levinas and Marx ——

Shunji HAGIHARA

When a bear found a mosquito biting a rabbit's face, he kindly slapped the mosquito with the rabbit; consequently the poor rabbit fell down in a faint. This sort of thing happens often to most of us. For example, when we go to the aid of someone, you may not please him nor get his thanks, but instead make him unhappy. In Russian expression, such a behavior is called 'a bear's kindness,' i.e. a well-meant action having an opposite effect. That sort of kindness is popular in every aspect of our life from our daily behaviors to political or religious ideologies. In this paper I examine 'bear's kindnesses' that take the form of Marxism.

Through the twentieth century ten million people were killed by this theory of Marxism. In brief, it is the denial of private possession and the abolition of a market economy; yet, a lot of people are still charmed by Marxism. This is because Marxism has been fighting for the equality of all men; therefore it appears so appealing, especially to the poor or miserable. But such kindness as Marxism is not a kindness in the true sense. As Martin Malia believed, Marx's idea was derived from his fantasy, to say more accurately in my words using a Dostoevsky's expression, from his 'love in fantasy.'

Zosima in Dostoevsky's "The Brothers Karamazov" separates 'the love in fantasy' from 'the love in action.' The person possessed by 'the love in fantasy' neither really faces his neighbor's trouble nor fully appreciates it. But at the same time, having intense desire to be good out of his vanity, he will invent 'the love of fantasy' to make himself believe that he could support mankind, especially the poor or miserable. As is often the case with 'a bear's kindness,' his love of fantasy will bring disaster to his poor neighbors. 'A bear's kindness,' which is a form of 'the first violence' stated in my previous paper, arises from 'the love in fantasy.' 'The first violence' consists of two conditions: 1) not fully listening to another's story and 2) imposing one's own story on others. 'A bear's kindness' meets these two conditions. These conditions are in sharp contrast to the person holding 'the love in action' that, in turn, can fully appreciate his neighbor's trouble and suitably give him a helping hand. Consequently, 'the love in action' produces love in the true sense.

In this paper, I tried to make clear what 'the love in action' is, referring to the E. Levinas' ethics of responsibility. In the Levinas' ethics, while our concrete behaviors of love and our beliefs in God are united, the former is much more important than the latter. Here is a community of thought between Levinas and Dostoevsky; however, Levinas is a Judaist and Dostoevsky is a

Christian. I have therefore tried to define a difference between these two religions, referring to the Christian concept 'kenosis', i.e. humility, because the 'kenosis' is so important for both Levinas and Dostoevsky. At the end of this paper, I have translated into Japanese the 49th chapter of the novel "Life and Fate" which Levinas highly praises as an example of 'the love in action.' A Soviet Jewish writer, Vasilii Grossman, wrote this novel. Though the Soviet government tried to frantically erase this novel from existence, copies were saved by a miracle.

[Main reference materials]
**Emmanuel Levinas,
*A L'HEURE DES NATIONS, Editions de Minuit, Paris, 1988
*Transcendance et inteligibilite, suivi d'un entreitien, Labor et Fides, 1984
**Martin Malia, THE SOVIET TRAGEDY; A History of Socialism in Russia, 1917-1991, The Free Press, USA, 1994
**Shunji Hagihara,
*Love and 'Defining Personal Boundaries' - from Dostoevsky to Emmanuel Levinas, "Dostoevsky Square" No.9, Tokyo, 2000, pp.67-80
*You name it therapy, but I name it violence - The first violence of narratives, "Language Center Journal" No.1, Osaka Prefecture University, 2000, pp.155-168
**Stéphane Courtois+Nikolas Werth, LE LIBRE NOIR DU COMMUNISME; Crimes, terreur et repression, S.A., Paris, 1997
**Василий Гроссман, Жизнь и Судьба, АСТ/ОЛИМП, М., 2001
**Ф.М.Достоевский Полное Собрание Сочинений в30 томах,т.14, НАУКА, Л., 1976